

My *Antonia* について：時間、聖書、古典からの一考察

A Study of *My Antonia*: An Analysis from Time, Bible and Classics.

榎 田 隆 宏

(高知大学人文学部英文学研究室)

(1)

キャザー文学の地位と方向を固めた最初の大作は *O Pioneers!* (1913) であるが、それと同じ素材を用いてしかも “*My Antonia* is the most famous of Willa Cather’s prairie novels and is generally considered to be her best.”⁽¹⁾と評価されているのが、*My Antonia* (1918) である。前者は、開拓者と大地との〈生〉と〈死〉の連関を通して生まれてくる「自然の美」と開拓者の「ヒロイズムと勇気と力」に最大の関心が置かれている極めて叙事詩的な作品であり、その最後は英雄的な開拓者の精神をも再生させる大地の生命力を称えて終わっている。⁽²⁾一方後者は、全編を通じて “‘*Optima dies . . . prima fugit* [the best days are the first to flee]’”⁽³⁾ というヴァーヂルの思いが色濃く漂う牧歌的な作品⁽⁴⁾ではあるが、ヒロインの開拓者としての強さとか大地の生命力よりも、母なる女性としての生き方や生命力の豊かさに力点と賛美が集中している。だから、前者の主人公アレクサンドラがギリシア神話の英雄を思わせる人間であったのに対して、後者の主人公アントニーアは庶民的な、より一層現実味のある人間として描かれている。

両者ともに主人公は女性であるが、上に述べた作品の力点を考えれば当然であろう。アレクサンドラが女であることを殺して生きたが故に、開拓期は勿論のことそれが終了しても、女としての幸せを得ることの出来なかった「哀れ」、(四十歳を過ぎてやっとカールの妻となることは出来ても、もはや子の母となることは望み得ないことの中にも見られる)の中に、開拓者として生き抜いたアレクサンドラの英雄的な「強さ」が浮き彫りにされているのである。一方、厳しい辺境の大地を相手に苦闘しながらも十一名もの子供を生み出す母なる女性アントニーアこそは、開拓者の生命力の豊かさを示すもの以外のなにものでもなからう。『おお開拓者達よ』と同様『私のアントニーア』に於いても、主人公が女性であることは、大きな意味を持っているのである。

小説は、現在十一名もの子供にかこまれ、意義深い人生を送っている女性開拓者アントニーアの幼馴染みで、今はニューヨークの大鉄道会社の顧問弁護士となっているジム・バーデンが、彼女と自分とのかかわりあいを通して、共に過ごした開拓初期の子供・少年時代や、その後の彼女の生き方とその意義を一人称の回想形式で書きとめ、二人の幼馴染みである作者に渡したものに、作者が短い序文をつけて発表した形をとっている。

ジムという語り手の設定は⁽⁵⁾、『おお開拓者達よ』にはなかったものであり、これは作品に、ある構成と視点を与えるものである。この作品が「物語」と呼ばれ、“loosely episodic structure”⁽⁶⁾を持つと批評されるのも、作者の意図していたこと⁽⁷⁾からきているのではあるが、エピソードを集めて作品を構成する方法は、“classicist”⁽⁸⁾たる作者が古典文学から学んだものかもしれない。事実、作品には多くの “classical allusions and references”⁽⁹⁾が見られる。

小説は最初の Introduction から、語り手ジムの幸福な過去の思い出(田舎)と不毛な現在の

都市生活に対する失望という牧歌的な色合いを読者に印象づけているが、本文全体の構成は語り手ジムの成長段階に合わせて、次の五つの時代 (chronology) に分かれる。第一巻 'The Shimerdas' —— ネブラスカの辺境開拓地 (the Divide) に於ける子供 (小学) 時代、第二巻 'The Hired Girls' —— ネブラスカの辺境の町ブラック・ホーク (Black Hawk) に於ける中学・高校時代、第三巻 'Lena Lingard' —— ネブラスカの州都リンカーン (Lincoln) 市に於ける前半の学生時代 (ネブラスカ大学)、第四巻 'The Pioneer Women's Story' —— 東部ボストンでの後半の学生時代 (ハーバード大学)、第五巻 'Cuzack's Boys' —— ハーバード大学学生時代にアントニアを訪れて以来二十年の歳月が過ぎ、今はニューヨークで大西部鉄道会社の顧問弁護士となっている時代。

本稿の目的は、この時間的順序に従い、大地の開拓と家庭の創建を成し遂げるアントニアの生き方とその意義を考えると、アントニアと共に過ごした子供時代がジムにとってどういう意味を持つのかということを探ることにある。なお、本文の所々に聖書やギリシア・ローマ古典からの言及や構成が見られるが、それが持つ意味についてはその都度考えてみたい。第一巻の子供時代から考えてみよう。

(II)

ジムが初めてアントニアに出会ったのは、ヴァージニアからシカゴを經由して、“utter darkness” (5) に取り囲まれたネブラスカの辺境の町ブラック・ホークへ降りた時であった。当時ジムは十歳で、両親を亡くして孤児となったために、早くから開拓地に住む祖父母のもとに引き取られたのであったが、一方十四歳のアントニアは英語も全く分からぬ貧しいボヘミア移民の娘で、めざす開拓地には “rattlesnake” にたとえられるクラジエク以外頼る人として居なかった。ジムとアントニアは共にその年少時代を一番近い隣人同志として開拓地で送る運命にあったが、二人の境遇は最初から大きく違っていたのである。この章では、バーデン家とシメルダ家とを比較することによって、ジムとアントニアの立場、境遇の違い、二人が共に過ごした開拓地の自然、ならびに子供時代の特色という三点について考えてみたい。バーデン家から見てみよう。

“Ours was the only wooden house west of Black Hawk” (13-14) という言葉から判断出来るように、最初からの移住者であるバーデン家は、まず何よりも経済的に安定している。加えて、この家族は祖父母、作男のオットー・フックスとジェイク・マーポール、そしてジムという “three-generation pattern” (10) から成り立っている。祖父の名前ヨシュアは、モーセの後を受けてエジプトから脱出してきたイスラエル人を「蜜とミルクの流れる約束の土地」(11)へと導き入れた旧約聖書の偉大な指導者を連想させる(12)が、事実ジムも “taciturn” (111) で “a clear, meditative eye” (137)を持つこの祖父に会った時に、“awe” (11)を感じたと述べている。家長たる祖父は、“intensely religious”(13)で “deliberateness and personal dignity” (11-12)を持ち、みんなから尊敬される人物であった。

一方祖母のエマリンは、“I was convinced that man's strongest antagonist is the cold. I admired the cheerful zest with which grandmother went about keeping us warm and comfortable and well-fed.” (66)と賛美されているように、家庭を守るに申し分のない女性であり、良き主婦としての彼女の人となりは、次のように述べられている。

she was exceedingly desirous that everything should go with due order and decorum. Her laugh, too, was high, and perhaps a little strident, but there was a lively intelligence in it. She was then fifty-five years old, a strong

woman, of unusual endurance. (10—11)

バーデン家では祖父が “the person to whom all religious and ethical problems are referred”⁽¹⁴⁾ とすれば、祖母は “the source of all judgments on aesthetic matters”⁽¹⁵⁾ であると言える。

作男のジェイクとオットーは単純ながらも、明るく忠実、善良な男達であり、彼等は常にジムの守り手であると同時に、時々彼に “wonderful animal stories” (66) とか “the outlaws and desperate characters he had known” (66) 等の話を聞かせては、ジムの子供時代の生活を楽しく冒険に満ちたものとするのに一役かっていた。彼等については、次のように述べられている。

What good fellows they were, how much they knew, and how many things they had kept faith with!

Fucks had been a cowboy, a stage-driver, a bartender, a miner, had wandered all over that great Western country and done hard work everywhere

Jake was duller than Otto. He could scarcely read, wrote even his name with difficulty, and he had a violent temper which sometimes made him behave like a crazy man But he was so soft-hearted that anyone could impose upon him. . . . They were both of them jovial about the cold in winter and the heat in summer, always ready to work overtime and to meet emergencies. (67—68)

彼等二人は孤児のジムにとっては、少なくとも部分的であれ、親の立場を占めていたと言ってよいだろう。⁽¹⁶⁾以上見てきたように、バーデン家によって象徴されるのは秩序と平和である。“fed us and warmed us and kept us cheerful” (68) というバーデン家だからこそ、ジムはこの家で「人間の最大の敵は寒さ」という開拓期の冬の最中でも、“enjoying the deepening grey of the atmosphere of comfort and security in my grandfather's house” (86) することが出来たのである。

では次に、シメルダ家を見てみよう。この家族はジムと同じ日に開拓地へやって来たボヘミアからの移民であり、一番近い隣人でもあったが、畑もにわとり小屋も持たず、アナグマのような住居 “ugly cave” (64) に象徴されるように、経済的には極度に困窮している。加えて、彼等には言葉の障壁があり、そのため憎みながらも不正直で不誠実な同国人のクラジエクに頼って共に生活せざるをえない。

家族はシメルダ夫婦、長男のアンブローシュ、次男の “crazy boy” (74) マレク、長女のアントニア、次女のユルカ、それにクラジエクから成っているが、統一のあるバーデン家とは違い二つに分裂している。⁽¹⁷⁾ヨーロッパ文化を理解しない一つのグループを形成しているのが、シメルダ夫人と長男のアンブローシュである。目や手などを通して象徴的に登場人物を語ることはキャザーのよく用いる手法であるが、“shrewd little eyes” (22) というシメルダ夫人の目や “His hazel eyes were little and shrewd, like his mother's, but more sly and suspicious” (23) というアンブローシュの目から窺い知れるように、二人とも実利的でずるく貪欲である。シメルダ夫人の移住の動機は、“‘America big country; much money’. . . ‘she want Ambrosch for be rich, with many cattle. . . . For Ambrosch my mama come here.’” (90) というものであった。加えて、彼女は新しい状況のもとで家庭を守る主婦としての才能を欠いている。ジムでさえ “I remember how horrified we were at the sour, ashy-grey bread she gave her family to eat.” (31) と述べているが、彼女のいたらなさ主婦としては申し分のないジムの祖母によって次のように指摘されている。

- 1) "There's no good reason why Mrs. Shimerda couldn't have got hens from her neighbours last fall and had a hen-house going by now. I reckon she was confused and didn't know where to begin. I've come strange to a new country myself, but I never forgot hens are a good thing to have, no matter what you don't have." (71-72)
- 2) "Haven't you got any sort of cave or cellar outside, Antonia? This is no place to keep vegetables. How did your potatoes get frozen?" (74)
- 3) "They're wanting in everything, and most of all in horse-sense." (78)

シメルダ家が最初から衣、食、住にわたって極度に貧しい生活を強いられるのも、シメルダ夫人の家政のまずさに大きな一因があるのである。

この母や息子と著しい対照を成しているのが、父と娘、シメルダ氏とアントニーアである。ヨーロッパ文化を理解しているのが、このグループである。シメルダ氏はボヘミアではすぐれた織工であり、ヴァイオリン奏者であったが、彼は何よりも知的でありかつ美を理解する者であった。それは "how white and well-shaped his own hands were. They looked calm, somehow, and skilled" (24) という彼の手によって象徴されているが、具体的には次のように述べられている。

- 1) "My father, he went much to school. He know a great deal; how to make the fine cloth like what you not got here. He play horn and violin, and he read so many books that the priests in Bohemie come to talk to him." (124)

ここで、ジムはアントニーアを通して、シメルダ氏の背景にあるヨーロッパ文化の世界へと目を向けられていくということを見落としてはなるまい。ジムにとってシメルダ氏は、その亡き後も "I will never forget him." (124) という人物であったのだ。

- 2) He untied the handkerchief, separated her hair with his fingers, and stood looking down at the green insect. When it began to chirp faintly, he listened as if it were a beautiful sound. (41-42)

しかし、シメルダ氏の教養も美的な感受性も厳しい開拓地では何の役にも立たない。ランドールは、それを "imagination and aesthetic sensitivity without strength are powerless to survive in a rough-and-ready new land"⁽¹⁸⁾と述べている。そもそもボヘミアを去ること自体が嫌であり、"old and frail and knew nothing about farming" (20) というシメルダ氏であれば、新大陸の新しい状況に適合するのはどだい不可能であり、日々彼の心を占めているのは故国(過去)との断ち切られた哀しみであり、また故国に対する郷愁である。それは、次の文に明らかである。

"My papa sad for the old country. He not look good. He never make music any more. At home he play violin all the time; for weddings and for dance. Here never. When I beg him for play, he shake his head no. Some days he take his violin out of his box and make with his fingers on the strings, like this, but never he make the music. He don't like this kawn-tree." (89)

このような父親はアンブローシュにとっては軽蔑の対象 ("[he was] contemptuous toward his father" [90]) でしかなかったが、父を心から愛し理解し、彼からヨーロッパ文化の精神を引き継

いでゆくのは家族の中ではアントニーアだけである。彼女が父親と共通する美的感受性を備えていることは、次の文を見れば明らかである。

Presently he [a green insect] began to sing for us—a thin, rusty little chirp. She held him close to her ear and laughed, but a moment afterward I saw there were tears in her eyes. She told me that in her village at home there was an old beggar woman who went about selling herbs and roots she had dug up in the forest. If you took her in and gave her a warm place by the fire, she sang old songs to the children in a cracked voice, like this. (39)

シメルダ夫人やアンブローシュの目が<闇>であり、シメルダ氏のそれが<陰>だとすれば、アントニーアの目はどこまでも明るく、暖かい<光>である。彼女の目は、次のように述べられている。

- 1) "She's got the pretty brown eyes." (5)
- 2) They were big and warm and full of light, like the sun shining on brown pools in the wood. (23)

このアントニーアだけがシメルダ氏にとって "darling" (98) であり、"a right hand" (98) であり、生き甲斐であった。次の文を見てみよう (この父と娘の関係は『おお開拓者達よ』でも同じである)。

He placed this book in my grandmother's hands, looked at her entreatingly, and said, with an earnestness which I shall never forget, 'Te-e-ach, te-e-ach my An-tonia!' (27)

このようにシメルダ家は分裂した二つのグループから成るが、その力関係は次のように述べられている。

Ambrosch was considered the important person in the family. Mrs. Shimerda and Antonia always deferred to him, though he was often surly with them and contemptuous toward his father. Ambrosch and his mother had everything their own way. Though Antonia loved her father more than she did anyone else, she stood in awe of her elder brother. (90)

シメルダ家によって象徴されるのは、カオスである。

これ迄のバーデン家とシメルダ家との比較から理解されるように、ジムとアントニーアの境遇と立場は大きく違っている。では次に、二人が共に過ごした空間と時間について考えてみよう。ジムとネブラスカとの出会いから見てみたい。それは "The only thing very noticeable about Nebraska was that it was still, all day long, Nebraska." (5) と述べられているように、ジムに驚きを与えた最初のもは、まず何よりもネブラスカの広さであった。次に、この広大なネブラスカを形成する大平原であるが、彼の受けた第一印象は次のように述べられている。これは、ブラック・ホークの駅からオットー・フックスの馬車に揺られて約二十マイル離れた祖父母の農場へと向かう途中、かすかな星明かりのもとで見たものである。

There was nothing but land: not a country at all, but the material out of which countries are made. No, there was nothing but land—slightly undulating I had the feeling that the world was left behind, that we had got

over the edge of it, and were outside man's jurisdiction. . . . I don't think I was homesick. If we never arrived anywhere, it did not matter. Between that earth and that sky I felt erased, blotted out. I did not say my prayers that night: here, I felt, what would be would be. (7-8)

東部の“the restrictive social order”⁽¹⁹⁾から両親に死なれて、こういう特異な西部の開拓地へと移ってきたジムには、この生活環境の激変は、その夜お祈りをやめさせるほどの衝撃を与えるものであった。しかし、恵まれたバーデン家の一員であり、大地を直接の素材とする開拓に参加しない子供のジムにとって、ネブラスカの辺境は、究極的には、自然の美と自由と冒険に満ちるものであった。最初はかすかな星明かりのもとで衝撃を与えられた大地ではあったが、明るい太陽のもとではたちまち“new feeling of lightness and content”⁽¹⁷⁾を与えられる。太陽の光の下で初めて具体的に見た自然は、次のように述べられている。

As I looked about me I felt that the grass was the country, as the water is the sea. The red of the grass made all the great prairie the colour of wine-stains, or of certain seaweeds when they are first washed up. And there was so much motion in it; the whole country seemed, somehow, to be running. (15)

未だ人間の手によって変質されていない未開の自然は、動物的なイメージの「赤い草」によって象徴され、その色を形容するのにホメーロスの『オデュッセイア』からの言葉“the colour of wine-stains”⁽¹⁵⁾あるいは“wine-coloured”⁽²²⁾が用いられている。⁽²⁰⁾インディアンのもの以外、伝統も歴史も文化もない新大陸の国の色を形容するのに、ギリシア古典の中の海の色と同じ言葉が用いられているのは、いかにも“classicist”たるキャザーらしいところであるが、ここではジムがその子供時代を過ごした辺境の地をオデュッセウスのイタカと同じ美と価値のあるものとして捉えていると解釈してよかろう（事実、ジムの人生の展開はまた、オデュッセウスのそれと重なっている）。自然美については、視覚、聴覚、触覚から捉えられた一つの例を次に挙げておきたい。

It was a beautiful blue morning. The buffalo-peas were blooming in pink and purple masses along the roadside, and the larks, perched on last year's dried sunflower stalks, were singing straight at the sun, their heads thrown back and their yellow breasts a-quiver. The wind blew about us in warm, sweet gusts. We rode slowly, with a pleasant sense of Sunday indolence. (127-128)

こういう自然の中で、自然の一部となって、その中に溶け込んでゆくことの中に、ジムは完全な幸福を感じるのである。次の文を見てみよう。

I kept as still as I could. Nothing happened. I did not expect anything to happen. I was something that lay under the sun and felt it, like the pumpkins, and I did not want to be anything more. I was entirely happy. Perhaps we feel like that when we die and become a part of something entire, whether it is sun and air, or goodness and knowledge. At any rate, that is happiness; to be dissolved into something complete and great. When it comes to one, it comes as naturally as sleep. (18)

旧世界から来た移民達と彼等が背負っている過去の物語、沢山の動物と鳥と植物、大西部をわた

り歩いた作男の話、聖書や古典の世界のイメージで満ちる辺境の生活は、ジムにとっては日々新しい驚きと喜びと冒険にあふれる世界であった。一つの代表的な冒険例は、二十四年も生きてきたとてつもない怪物のガラガラヘビを殺したことであるが、その時の気持ちをジムは “The great land had never looked to me so big and free.” (48) と述べている。こうしたジムの世界は、*The Swiss Family Robinson* のロビンソン家やロビンソン・クルーソーの生活でさえ、色あせたものに思わせるほどの “adventurous” (66) なものだったのである: “I got ‘Robinson Crusoe’ and tried to read, but his life on the island seemed dull compared with ours.” (100)

これ迄見てきた自然の美と自由と冒険に満ちた “extravagantly happy” (65) な子供時代を、ジムはアントニアと共有したのである。では次に、彼女について見てみよう。

貧しい移民の子であるアントニアの生活は、ただ開拓の傍観者にすぎず、日々 “entirely happy” (18) として過ごすことの出来たジムとは違って、幸福の反面、厳しく春秋に富んだものであった。「人間の最大の敵は寒さ」という開拓地で、冬はジムにとって喜びの対象ではあっても、アントニアには恐怖と死を招来するものであった。最愛の父は、この冬の最中に現実への絶望と故国ボヘミアへの郷愁から自殺する。しかし、アントニアはそうした大きな哀しみにも挫けず、父を心の支えとして未来をみつめ、その生き方は少女ながらも家庭を創建する母なる女性にして開拓者のそれである。次の文から見てみよう。

Antonía loved to help grandmother in the kitchen and to learn about cooking and housekeeping. She would stand beside her, watching her every movement. (31)

主婦としては失格の母親を持ちながら、いやそれだからこそ、アントニアは申し分のない主婦であるジムの祖母から料理や家事を修得していこうとするのである。と同時に、アントニアは次のようにも述べている。ここに、厳しい辺境の大地を素材として生きてゆく開拓者たるに相応しい彼女の素質と強さを見ることが出来る。

- 1) “I help make this land one good farm.” (123)
- 2) “Oh, better I like to work out-of-doors than in a house!” she used to sing joyfully. “I not care that your grandmother say it makes me like a man. I like to be like a man.” She would toss her head and ask me to feel the muscles swell in her brown arm. (138)

父の死後、厳しい開拓仕事の中でアントニアは一時男のように荒々しく変わったが、それは外面だけで内面までは変わっていない。逞しい開拓者とは言っても、アントニアは本質的にアンブローシュとは異なっている。彼女は、シメルダ氏を通してヨーロッパ文化と繋がっている。彼の死後、彼女がヨーロッパ文化というものを新大陸に植え付け、伝えてゆくのである。小説の最後でジムは “Whatever we had missed, we possessed together the precious, the incommunicable past.” (372) と述べているが、これは二人が共有した時間（子供時代）と空間（辺境の自然）に対する評価のみならず、アントニアその人の評価でもあることは申すまでもなからう。次に、子供時代の特色について考えてみたい。

小説全体はジムの思い出話であり、過去から現在迄約三十一年間の時間にわたっているが、⁽²¹⁾ 第一巻で取り扱われている時間は他の四巻とは違う特別のものである。なぜなら、それは開拓地という農耕社会を背景としたジムの子供時代が、中心となっているからである。クロノス的な時間の外

側において未だその重みを知らない子供の時間観とは、“a sense of timelessness”⁽²²⁾と言うのに誰も異論はなからうが、それはまた背景である農耕社会の時間観とも共通するものを持っているのである。なぜなら、一定の時間のサイクルで反復、再生、循環する自然現象を相手として生きる農耕社会であれば、そこで形成される時間イメージは回帰的な円環であり、究極的には死は存在しないと云えるからである。⁽²³⁾と見てくれば、第一巻が円環イメージや“timeless”⁽²⁴⁾なイメージの時間観とその世界観から成り立つのも自然であろう。

まず物語の構成であるが、秋で始まり夏で終るという回帰的、循環的な形をとっている。⁽²⁵⁾季節のサイクルの中で時間を考えれば、ギリシア神話のペルセポネとハデスの物語が象徴するように、生と死とが連続した回帰的なものとなるのは自明であるが、それはまた“entirely happy” (18)なる子供時代を語るに最も適した構成と言えるのである。

次に、“The whole prairie was like *the bush that burned with fire and was not consumed*⁽²⁶⁾(italics mine).” (40) という旧約聖書からの一つのアルージュンが用いられているが、これは子供時代の“timeless world”⁽²⁷⁾を具象化していると共に、“the material out of which countries are made” (7) である草原の大地が、「聖なる空間」⁽²⁸⁾であったと解釈出来る。その聖なる地へやって来たアントニーアは、モーセと同じように神から一つの大きな使命を託されていたのである。

ともあれ、子供とは「時間のない世界」に住むが故に、時間の重み、すなわち究極的には死とその意味を知らないものだとすると、その世界観は極めてオプチミスチックなものとなるのは言うまでもない。二つの死の例から、それを見てみよう。

その一つは、ロシア移民のパーヴェルが臨終の床で、ざんげの口調でシメルダ氏に語ったものである。彼は昔ピーターと共にある花嫁の家で行なわれた結婚式に出席した後、月光の雪の中、新郎新婦を花婿の家へ送って行く途中、森の中で狼の群に襲われ自分達が助かりたいために、二人を樫から突き落として狼の餌食にしたというのである。ここには、幸福の絶頂にある新郎新婦が凄惨な死をとげるという明暗を通して、極限状況に立たされた時の人間の闇の姿が、恐ろしいまでに示されている。しかし、オプチミスチックな世界観しか知らない子供のジムにとっては、この物語でさえ痛ましくはあってもしかし、「喜び」の対象、“as if the wolves of the Ukraine had gathered that night long ago, and the wedding party been sacrificed, to give us a painful and peculiar pleasure” (61) としか考えられないのである。もう一つの例を見てみよう。

それは、シメルダ氏の自殺である。“I suppose, in the crowded clutter of their cave, the old man had come to believe that peace and order had vanished from the earth, or existed only in the old world he had left so far behind.” (86) という言葉に明らかなように、故国ボヘミア（過去）への郷愁と現在への絶望の果てに、彼は冬の最中（冬は植物神話では再生前の死の季節である）自ら生命を絶つのであるが、その凄惨さは次のように述べられている。

1) “I seen bunches of hair and stuff sticking to the poles and straw along the roof. They was blown up there by gunshot, no question.” (98)

2) Jake and Jelinek went ahead on horseback to cut the body loose from the pool of blood in which it was frozen fast to the ground. (114)

このシメルダ氏の深い絶望からくる死でさえ、子供のジムにとっては次のようにロマンチックに受けとめられている。

I wondered whether his released spirit would not eventually find its way back to his own country. I thought of how far it was to Chicago, and then to

Virginia, to Baltimore—and then the great wintry ocean. No, he would not at once set out upon that long journey. Surely, his exhausted spirit, so tired of cold and crowding and the struggle with the ever-falling snow, was resting now in this quiet house. (101)

なお、シメルダ氏の死後フックスの語った言葉に、“You never really knew a man, he said, until you saw him die.” (111-112) というのがあるが、これはギリシア悲劇に登場する人物達の言葉を連想させる。参考までに例を挙げたい。

1. 「人の一生というものは、幸か不幸か、その人が死んでみなければわからない」⁽²⁹⁾ソポクレス篇「トラキスの女たち」の中のディアネイラの言葉
2. 「かの最後の日の訪れを待つうちは、悩みをうけずこの世の涯を越すまでは、いかなる死すべき人も幸ある者と呼ぶなかれ」⁽³⁰⁾ソポクレス篇「オイディプス王」の中のオイディプスの言葉
3. 「まことに人の運命のよしあしは、その生涯を閉じるまで、さだめがたいと知らねばならぬ」エウリピデス篇⁽³¹⁾「トロイアの女」の中のヘカベの言葉
4. 「まことこの世の何人をも、幸せと呼ぶことはできない。死に行く人の最後を見るまで——生きの日をいかに過ごして世を去って行くものか、それを見るまで」⁽³²⁾エウリピデス篇「アンドロマケ」の中のアンドロマケの言葉

シメルダ氏の悲劇をギリシア悲劇の、特にソポクレスやエウリピデスの劇中の人物達と重ね合わせて読んだとしても、それは決して的はずれではなからう。シメルダ氏の悲劇とは、性格悲劇と言うよりは運命悲劇であったということを考えるならば!

さて、究極的に死の存在しない時間観と、したがって極めてオプチミスティックな世界観が子供時代の特色とすれば、ジムがその時代を労働の必要もなく自然の美と自由と冒険を享受しながら過ごした開拓地ディヴァイドは、まさにエデンの園であったと言える。ジムの人生に於いて、ここで過ごした子供時代が、いかなる意味を持つのかという点については本稿の最後で考えたい。次に、町を舞台としたジムの中学・高校時代について考えてみよう。

(Ⅲ)

開拓地ではほぼ三年過ごした後、ジムは祖父母と共にブラック・ホークへ移転する。アントニーアもまた、ジムの祖母の世話で町に出て来てハーリング家の女中となる。ここでは、開拓地出身の移民の娘達と町の若者達を通して田舎と町を比較し、更に町でのアントニーアの生き方について考えてみたい。ジムの移転は、次のように述べられている。

we bought Preacher White's house, at the north end of Black Hawk. This was the first town house one passed driving in from the farm, a landmark which told country people their long ride was over. (143)

ここに、ジムのイノセントな子供時代の終わったことが、空間を通して象徴的に示されている。ジムの新しい家が開拓地を出てから出会う最初の町の家であるということは、彼がエデンの園を出て大人の世界へと一歩足を踏み入れたという事実を示すもの以外の何ものでもない。⁽³³⁾それは、“That river was to be my compensation for the lost freedom of the farming country.” (145) という彼自身の言葉からも明らかである。ジムはもう十三歳なのである。この移

転を契機としてフックスとジェイクも去り、バーデン家の“three-generation pattern”もくずれ。宗教的イメージで満ちていた祖父は町では“a deacon in the new Baptist Church” (145) となり、祖母は“church suppers and missionary societies” (145) で忙しくなるが、子供時代の終ったジムは“quite another boy” (145) となる。

思春期の特色が性の芽生えであることを思えば、大人の世界へ足を踏み入れたジムの語る第二巻が、その底流に＜性＞を中心として展開しているのもごく自然であろう。異性に関心を抱き始めたジムは、移民の娘達と町の娘達の肉体と生き方の違いに目を向け、やがて、それは前者の賛美と町の人々をも含めた後者の痛烈な批判という評価へと繋がってゆく。まず前者、“the attraction of the fine, well-set-up country girls” (197) から見てみよう。

1) I can remember something unusual and engaging about each of them. Physically they were almost a race apart, and out-of-door work had given them a vigour which, when they got over their first shyness on coming to town, developed into a positive carriage and freedom of movement, and made them conspicuous among Black Hawk women. (198)

2) Those girls had grown up in the first bitter-hard times, and had got little schooling themselves. But the younger brothers and sisters, for whom they made such sacrifices and who have had ‘advantages,’ never seem to me, when I meet them now, half as interesting or as well educated. The older girls, who helped to break up the wild sod, learned so much from life, from poverty, from their mothers and grandmothers; they had all, like Antonia, been early awakened and made observant by coming at a tender age from an old country to a new. (198)

若さと生命力にあふれ、家族を助けるという目的と使命を持って生きる移民娘達の生き方はジムの感動と賛美をよぶものであったが、もともとが東部出身の町の人々にとっては、彼女達はただの“hired girls”でしかありえなかった。ジムは、そうした町の人々の移民娘達に対する態度を“very stupid” (200) と痛罵している。では次に、移民娘達とは対照的な町の娘達について見てみよう。

There was not a tennis-court in the town; physical exercise was thought rather inelegant for the daughters of well-to-do families. Some of the high-school girls were jolly and pretty, but they stayed indoors in winter because of the cold, and in summer because of the heat. When one danced with them, their bodies never moved inside their clothes; their muscles seemed to ask but one thing—not to be disturbed. I remember those girls merely as faces in the schoolroom, gay and rosy, or listless and dull, cut off below the shoulders, like cherubs The daughters of Black Hawk merchants had a confident, unenquiring belief that they were ‘refined,’ and that the country girls, who ‘worked out,’ were not. (198—199)

以上の対比から理解されるように、ブラック・ホークの若者達すべてにとっては、温室育ちの町の娘達よりも青春の光にあふれる移民娘達の方がはるかに魅力があったのは申すまでもなく、そのために後者の存在は親達にとっては“a menace to the social order” (201) とまで思われもした

が、しかし実際はその心配は杞憂であった。若者達は何よりも “respectability” (202) を重じたからである。彼等の夢は町の娘達と結婚し、“a brand-new little house” (201) に住み、“best chairs that must not be sat upon, and hand-painted china that must not be used” (201) に囲まれて生活することであった。このような若者達に対して、ジムが “I looked with contempt at the dark, silent little houses about me as I walked home, and thought of the stupid young men who were asleep in some of them.” (225) と痛烈に批判しているのも当然であろう。このジムの厳しい目は、やがて若者達から町の人々へと向けられていく。彼等は次のように酷評されている。

1) There was not a man in Black Hawk who had the intelligence or cultivation, much less the personal distinction, of Antonia's father. (201)

2) On starlight nights I used to pace up and down those long, cold streets, scowling at the little, sleeping houses on either side, with their storm-windows and covered back porches. They were flimsy shelters, most of them poorly built of light wood, with spindle porch-posts horribly mutilated by the turning-lathe. Yet for all their frailness, how much jealousy and envy and unhappiness some of them managed to contain! The life that went on in them seemed to me made up of evasions and negations; shifts to save cooking, to save washing and cleaning, devices to propitiate the tongue of gossip. This guarded mode of existence was like living under a tyranny The people asleep in those houses, I thought, tried to live like the mice in their own kitchens; to make no noise, to leave no trace to slip over the surface of things in the dark. The growing piles of ashes and cinders in the back yards were the only evidence that the wasteful, consuming process of life went on at all. (219—220)

生命力と生き方に関して移民の娘達と町の若者達との対照的な違いを見れば、両者の将来の力関係は、おのずと明らかである。その運命の逆転は、次のように述べられている。

One result of this family solidarity was that the foreign farmers in our county were the first to become prosperous. After the fathers were out of debt, the daughters married the sons of neighbours—usually of like nationality—and the girls who once worked in Black Hawk kitchens are to-day managing big farms and fine families of their own; their children are better off than the children of the town women they used to serve. (200)

この事実は、ジムの観察の正しさを示すと同時に、また奇しくもジムとアントニーアの将来の姿とも重なるものである。ジムがこのレッド・クラウドからリンカーンへ、リンカーンからボストンへ、ボストンからニューヨークへとオデュッセウスと同様、古里から遠く離れてゆくにつれて、その目はますます古里の開拓地へ、過去へと向けられてゆくが、一方アントニーアは今は出稼ぎ娘として町には住んでいるが、最終的には開拓地での豊かな家族の創建と大地の開拓の達成という意義ある目標、結果に向かって、生命力に満ちあふれるが故に時には勇み足をしながらも、一步一步前進的に進んで行く。前者の人生は<死>へと下降してゆくのに対して、後者のそれは<生>へと上昇していくのである。ともあれ、ここでは、移民娘の一人として開拓地からレッド・クラウドへ

出て来たアントニーアの生き方を見てみよう。“Grandmother often said that if she had to live in town, she thanked God she lived next the Harlings.” (147) という言葉から理解出来るように、アントニーアの奉公先のハーリング家は、“as much paragons of town life as the Burdens were life in the country”⁽³⁴⁾であった。アントニーア自身も “After the long winter evenings on the prairie, with Ambrosch's sullen silences and her mother's complaints, the Harling's house seemed, as she said, 'like Heaven' to her.” (175) と語っている。

家族は “the most enterprising business man in our county. He controlled a line of grain elevators in the little towns along the railroad to the west of us, and was away from home a great deal” (148) というハーリング氏とその妻、それに成人した長女のフランシス、長男のチャーリィ (十六歳)、次女ユリア (十四歳)、三女のサリィ (十三歳) と四女のニィナ (六歳) から成っている。ハーリング氏は “there was something daring and challenging in his eyes” (157) という目から明らかのように、“arrogant” (157) で “autocratic and imperial” (157) な人物ではあったが、仕事のためほとんど家には居なく、その時は夫人が家長であった。子供好きのアントニーアにとって、ハーリング家がブラック・ホークでの「天国のような」理想的な家だとすれば、その家に似たハーリング夫人もまた、主婦として母として申し分のない人であろうと考えても不自然はない。事実、次の言葉が、このことを証明している。

Mrs. Harling was short and square and sturdy-looking, like her house. Every inch of her was charged with an energy that made itself felt the moment she entered a room. Her face was rosy and solid, with bright, twinkling eyes and a stubborn little chin. She was quick to anger, quick to laughter, and jolly from the depths of her soul. How well I remember her laugh; it had in it the same sudden recognition that flashed into her eyes, was a burst of humour short and intelligent. Her rapid footsteps shook her own floors, and she routed lassitude and indifference wherever she came. She could not be negative or perfunctory about anything. Her enthusiasm, and her violent likes and dislikes, asserted themselves in all the everyday occupations of life. Wash-day was interesting, never dreary, at the Harlings'. Preserving-time was a prolonged festival, and house-cleaning was like a revolution. When Mrs. Harling made garden that spring, we could feel the stir of her undertaking through the willow hedge that separated our place from hers. (148—149)

五人の素晴らしい子供を持ち、明るく賢明で生命力にあふれる夫人からアントニーアは家事、育事にわたって多くのことを学ぶのであるが、二人の間には基本的な共通点があった。次の文を見てみよう。

There was a basic harmony between Antonia and her mistress. They had strong, independent natures, both of them. They knew what they liked, and were not always trying to imitate other people. They loved children and animals and music, and rough play and digging in the earth. They liked to prepare rich, hearty food and to see people eat it; to make up soft white beds

and to see youngsters asleep in them. They ridiculed conceited people and were quick to help unfortunate ones. Deep down in each of them there was a kind of hearty joviality, a relish of life, not over-delicate, but very invigorating. I never tried to define it, but I was distinctly conscious of it. I could not imagine Antonia's living for a week in any other house in Black Hawk than the Harlings'. (180)

ここに、アントニーアが将来家族の創建と大地の開拓を成し遂げるのに相応しい特質を豊かに備えているのを、現実のハーリング夫人の姿と重ね合わせて見る事が出来る。この特質は、この巻で登場するリーナ・リングードとの対比の中で一層はっきりと示されているが、彼女については次の章でまとめて考えてみたい。

ともあれ、これ迄見てきた田舎と町に対する対照的な評価と両者の将来の力関係という延長上に、第二巻のクライマックスとも言える一つの光景が展開する。大学入試を目前にした夏のある日、ジムはアントニーアやその他の移民娘達と共にリパブリカン川の川岸へピクニックに出かけたが、そこで次のような光景を目撃する。

Presently we saw a curious thing: There were no clouds, the sun was going down in a limpid, gold-washed sky. Just as the lower edge of the red disk rested on the high fields against the horizon, a great black figure suddenly appeared on the face of the sun. We sprang to our feet, straining our eyes toward it. In a moment we realized what it was. On some upland farm, a plough had been left standing in the field. The sun was sinking just behind it. Magnified across the distance by the horizontal light, it stood out against the sun, was exactly contained within the circle of the disk; the handles, the tongue, the share—black against the molten red. There it was, heroic in size, a picture writing on the sun. (245)

この象徴的で息をのむ場面は、七つの黄金都市を求めてはるばる新大陸のネブラスカまでやって来たが、しかし最後は失意の内に死んだスペインの冒険家コロネイドの話の後に続いている。コロネイドの姿は、同じようにヨーロッパからやって来ながら失意と絶望の中で死んだシメルダ氏と重なるものである。コロネイドもシメルダ氏も彼等自身の結果だけを見れば、不毛の〈死〉のイメージではあるが、これが大地という女性的なものと鋤という男性的なものとが交わるという当然農耕イメージそのものながら、かつまた性的で生産的な〈生〉のイメージへと連結していることを見落としてはなるまい。⁽³⁵⁾ 彼等のもたらしたヨーロッパの文化や精神は、定住農耕生活の中で花を開いていこうとしているのである。

開拓者と大地が結びついて初めて定住農耕生活が可能となることを考えれば、鋤とは開拓者の象徴であり、それが地平線の赤くて丸い太陽の中に大きく黒々と浮かび上がる絵全体は、開拓者による定住農耕生活を賛歌するものと考えることが出来る。⁽³⁶⁾

次に、この光景が持つ具体的な意味について考えてみたい。まず、広大な“prairie”の中で未だ卑小ながらも、ともかく耕作された“fields”とその“fields”の一角に立つ“littleness”そのものの鋤という取り合わせは、定住農耕生活が始まったばかりであることを告げている。

第二に、すでに述べたように大地と鋤との交わりは性的、生産的イメージを感じさせるが、その両者の交わりが、特に開拓者を象徴する鋤が、生命を育む太陽によって“heroic”なまでに

“magnified”されている。と見てくれば、両者の結合の中から、やがて大地と人間の、特に後者である開拓者の“magnified”された姿が生まれてくるのも不思議はなからう。すなわち、赤い太陽の中で“strengthened and simplified” (262)された大きな鋤の姿は、開拓地と町との運命の逆転の中で最終的には大地の開拓と豊かな家族の創建を成し遂げる未来のアントニアを象徴し、鋤を含めた全体の絵姿は、そうしたアントニアによる定住農耕生活へのジムの尽きることのない賛美へと結びついてゆくのである。

しかし、アントニアもジムもその段階に至るのは、まだ四分の一世紀ほど先のことであり、二人にはまだいくつもの、特に性と結び付く試練が待ち受けている。ジムについては次の章で考えることにして、ここではアントニアのその一つについて考えてみよう。アントニアにとってハーリング家は町の理想的かつ楽しい家ではあったが、彼女はここを出て“notoriously dissolute with women” (210)という高利貸しのウィック・カッターのもとに住み込みで働くことになる。ハーリング氏に風紀上の問題から、その頃町で流行っていたダンスへ出ることを止められたからである。

ダンスとは“vivifies an inner rhythm”⁽³⁷⁾であり、生命力あふれる若いアントニアにぴったり合うものであれ、またハーリング氏の人柄が“arrogant” (157)で“autocratic and imperial” (157)であれ、彼女のこの行動は、いささか性急で勇み足と考えられる。この行動が、最後にジムをも巻き込む強姦未遂事件へと繋がってゆく。その結果、今迄ジムの誇りの対象であったアントニアは、“I never wanted to see her again. I hated her almost as much as I hated Cutter.” (250)と一転して憎しみの対象となる。憎しみの対象となったアントニアは、次の巻では全く登場しない。では次に、ジムのネブラスカ大学学生時代に移ろう。

(IV)

ジムはレッド・クラウドから州都リンカーンへ移り、大学生活を始める。そして同じくレッド・クラウドから、この地ヘドレス・メーカーとして移って来ていたリーナ・リンガードと再会し、ある種の恋愛関係に入る。この章では、ジムとリーナとのかかわりあいを通してリーナという人間像について考えてみたい。それが、結局この巻には登場しないアントニアを浮き彫りにすることになる。

ジムは、リンカーンで大きな影響を受ける二人の人物に出会う。一人はラテン科の主任であるガストン・クラリックで、もう一人はリーナ・リンガードである。前者から考えてみよう。彼は大変優秀な学者であったが、健康上の理由から一時的に“the young college that had lifted its head from the prairie only a few years before” (258)へと赴任して来たのである。この若い学者からジムは直接の影響を受ける幸運に恵まれた。それはジムにとって最も幸福な“mental awakening” (257)の経験であり、彼によってジムはヨーロッパの古典の世界へと目を向けられたのである。初めて出会う“the world of ideas” (258)は、ジムに“everything else fades for a time, and all that went before is as if it had not been” (258)と言わしめるほど彼を魅するものではあったが、しかし最初の頃はまだその世界は彼の人生とはなんの連関もない“impersonal things” (262)としてしか捉えられていない。それは、次のように述べられている。

Although I admired scholarship so much in Cleric, I was not deceived about myself; I knew that I should never be a scholar. I could never

lose myself for long among impersonal things. Mental excitement was apt to send me with a rush back to my own naked land and the figures scattered upon it. While I was in the very act of yearning toward the new forms that Cleric brought up before me, my mind plunged away from me, and I suddenly found myself thinking of the places and people of my own infinitesimal past. They stood out strengthened and simplified now, like the image of the plough against the sun. (262)

“in the lives of mortals, the best days are the first to flee” (263) とか、あるいは “for I shall be the first, if I live, to bring the Muse into my country” (264) というヴァージルの『農耕詩』の世界が、ジムの人生体験である “my own naked land and the figures scattered upon it” と結び付いたものとして捉えられるようになるのは、一つにはヴァージルの言う “patria” とは “his [Virgil] own little ‘country’; to his father’s fields, ‘sloping down to the river and to the old beech trees with broken tops’” (264) であるという感動的なクラリックの説明がヴァージルの “patria” とジムのディヴァイドを結び付けたとしても、久しぶりに訪ねて来たリーナとの出会いによってなのである。彼女が、ジムの賛美してやまない移民娘達の思い出を呼び起こしたのだ。リーナによって与えられた啓示は、次のように述べられている。

It came over me, as it had never done before, the relation between girls like those and the poetry of Virgil. If there were no girls like them in the world, there would be no poetry. I understood that clearly, for the first time. This revelation seemed to me inestimably precious. (270)

ここで初めて “little world [Jim’s Divide] is part of the great world”⁽³⁸⁾となり、古典の世界(芸術)とジムの世界(人生)とは互いに連関したものとして捉えられたのである。だからこそ、ジムの “the places and people of my own infinitesimal past” (262) が聖書や古典の世界と色豊かに結びつけられているのである。

リーナとの出会いによって芸術と人生との結び付きを啓示されたジムであるが、両者の関係はこれ以後どう展開してゆくのであろうか。アントニーアとの比較の中で、具体的なリーナ像を見てみよう。

彼女はアントニーアと同じ年頃で、ドレス・メーカーになるために町へ出てきた移民娘であるが、アントニーアとはあらゆる点で対照的である。リーナの特徴は、まず何よりも絶えず太陽にさらされても変わらぬ “a miraculous whiteness” (165) という肌によって象徴されている。これを髪も目も肌も “brown” (23) というアントニーアと比べてみるなら、両者の違いはおのずと明らかである。「茶色」は大地の色であり、“I like to work out-of-doors than in a house!” (138) というアントニーアには相応しいものであるが、「奇跡的な白さ」は町や都会の色であり、“I never did like out-of-door work” (162) とか “I’m going to be a dressmaker.” (161) というリーナにこそ似つかわしいものである。

第二に、父シメルダ氏からヨーロッパ文化の精神を受け継いでいるアントニーアは、いつもその雰囲気強く持っているのに対して、リーナは見事と言えるほどすっぱりとアメリカ社会の中に溶け込んでいる。二人の話す英語の違いが、このことを象徴的に示している。

Antonia had never talked like the people about her. Even after she learned

to speak English readily, there was always something impulsive and foreign in her speech. But Lena had picked up all the conventional expressions she heard at Mrs. Thomas's dressmaking shop. Those formal phrases, the very flower of small-town proprieties, and the flat commonplaces, nearly all hypocritical in their origin, became very funny, very engaging, when they were uttered in Lena's soft voice, with her caressing intonation and arch naivete. (281)

第三に、前巻では五人の素晴らしい子供の母であるハーリング夫人と大いに共通するところを持ち、子供達に好かれ、子供達を愛する "a natural-born mother" (318) としてのアントニーアのイメージが強調されていたが、リーナは "I'm not going to marry anybody." (290) という言葉に見られるように、決して結婚や家庭を求めはしない。これは、結婚の準備をするアントニーアを見て、"I never saw a girl work harder to go to housekeeping right and well-prepared." (308) とほめちぎるスチーヴンズ未亡人の言葉に明らかなように、家庭の建設に熱心なアントニーアとは全く対照的である。リーナの態度は男性一般に対する不信と開拓地での苦しい生活体験からきているにせよ、"You'll get tired of this sort of life, and you'll want a family." (291) というジムの問いに対して、彼女はきっぱりと "Not me. I like to be lonesome." (291) と言い切っている。そうした彼女の結婚観、家庭観は、具体的に次のように述べられている。

1) 'I don't want to marry Nick, or any other man,' Lena murmured. 'I've seen a good deal of married life, and I don't care for it. I want to be so I can help my mother and the children at home, and not have to ask lief of anybody.' (162)

2) 'I don't want a husband. Men are all right for friends, but as soon as you marry them they turn into cranky old fathers, even the wild ones. They begin to tell you what's sensible and what's foolish, and want you to stick at home all the time. I prefer to be foolish when I feel like it, and be accountable to nobody.' (291)

第四に、これが一番重要なことであるが、"You [Jim] are going away to school and make something of yourself. I'm just awful proud of you." (224) というアントニーアの言葉から分かるように、彼女はジムを誇りに思い、彼を未来に向かって前進させる人間であるのに対して、一方リーナは意識するとしなやかかわらず、異性を引きつけ "out of his head" (166) にさせては彼を不安と沈滞に陥れる人間である。だから、"she was never a girl to be soft." (268) と評されるアントニーアが思春期のジムに対して "Lena's all right, only—well, you know yourself she's soft that way. She can't help it. It's natural to her." (225) と言って、リーナとの付き合いを諫めたのである。アントニーアとリーナとの対照的な違いは、彼女達とダンスを踊ることの中で象徴的に示される。アントニーアと踊ると、誰もが "a new adventure" (223) に出発するような明るい前進の気分になるのに対して、リーナの場合は、"coming home to something, of inevitable, fated return" (222—223) と暗い後退の感じを与えられ、そのためしばらくすると "restless" (223) となるのである。一言で言えば、アントニーアは未来に生きる人間であるのに対して、リーナは現在にのみ生きる女性と言える。前

者はジムを前進させるが、後者は彼を沈滞させるのは当然であろう。これが、“there is a great difference in the principles of those two girls” (313) と言われる両者の評価を分かち決定的な違いである。この違いは、ジムの夢の中で一つのはっきりとした形をとって現われる。その夢を見てみよう。

One dream I dreamed a great many times, and it was always the same. I was in a harvest-field full of shocks, and I was lying against one of them. Lena Lingard came across the stubble barefoot, in a short skirt, with a curved reaping-hook in her hand, and she was flushed like the dawn, with a kind of luminous rosiness all about her. She sat down beside me, turned to me with a soft sigh and said, ‘Now they are all gone, and I can kiss you as much as I like.’

I used to wish I could have this flattering dream about Antonia, but I never did. (225—226)

夢で見るリーナのイメージは“barefoot”、“a short skirt”、“a soft sigh”、“kiss”という言葉から窺えるように、まず何よりも性的であるが、そうしたリーナの特徴を一番よく示しているのは手に持つ“a curved reaping-hook”であろう。鎌はギリシア神話ではクロノスが父ウラノスの男根を切り取った道具であり、またその鎌を持つクロノスとは、すべてのものをなぎ倒し滅びへと導く時間の象徴とされている。畑の中に満ちる穀物の束とは、リーナの鎌によって切り取られた実りある生命と解釈することが出来る。とすれば、いかにリーナがジムの賛美する出稼ぎ移民娘達の一人であるとしても、ジムの性的関心を深いところで刺激し続ける彼女との付き合いが、時間の流れと共に彼の生命力、前進力を徐々に刈り取ってゆくのは明らかである。ジムの次の言葉は、この証明以外の何ものでもない。

All this time, of course, I was drifting. Lena had broken up my serious mood. I wasn't interested in my classes. I played with Lena and Prince [dog], I played with the Pole, I went buggy-riding with the old colonel, who had taken a fancy to me and used to talk to me about Lena and the ‘great beauties’ he had known in his youth. We were all three in love with Lena. (288)

それはやがてクラリックの知るところとなり、二人の関係も急に終りを告げることになる。彼がジムをこの沈滞から解放するべく、ハーバード大学へ転出するのを機に、自分と共にジムを東部へ連れて行くことにしたからである。

別れが近づいてきても、リーナの心にあるのは現在だけである。それは、“‘You are going, but you haven't gone yet, have you?’ she used to say.” (293—294) という彼女の言葉に明らかである。サザランドは、この中にオデュッセウスに語りかけるカリュプソンの“the divine voice”⁽³⁹⁾を聞くことが出来ると言う。そう言えば、この第三巻の構成は『オデュッセイア』の第五巻とよく似ている。リーナの魅力の虜になりながら沈滞に苦しむジムはオデュッセウスであり、ジムを魅し引き留めて彼の前進を阻むリーナはカリュプソ、二人の関係を断ち切ってジムを解放、出発させるクラリックはヘルメスと言うことが出来る。

ジムの人生とはオデュッセウスの冒険にたとえることが出来るとするなら、古里の地イタケで賛美の対象そのものであるペネロペに再会する迄、様々な地を流浪していくオデュッセウスのように、

ジムもまた古里の開拓地ディヴァイドでアントニーアと感動の対面をする迄、多くの地を移ってゆかねばならないのである。開拓地からレッド・クラウドへ、レッド・クラウドからリンカーンへと移り住んできたジムではあるが、彼は更にこのリンカーンから西部に別れを告げて、東部ボストンへと向かって去ってゆくのである。

第三巻ではアントニーアは全然登場しないけれども、しかし作者は彼女とは全く対照的なリーナに焦点を当てることによって、アントニーアの間像とその意味を浮き彫りにしていると言える。では次に、ジムのハーバード大学時代に於ける彼とアントニーアとのかかわりあいを見てみよう。

(V)

ジムがハーバード大学に入って二年の間に、アントニーアはラリー・ドノヴァンに欺かれて私生児をもうける。このことについてはジムの祖父の農場を借りて管理しているスチーヴンズ未亡人が、話の一部始終を彼に語る形をとっている。⁽⁴⁰⁾この章では、結婚の失敗という不幸な体験の後、アントニーアがどういう人生を歩んでゆくのかということを経験とのかかわりあいを通して考えてみたい。

ジムが二年ぶりに東部から帰省してみると、男に捨てられ、私生児をかかえ、実家の農場で働くアントニーアが、“an object of pity” (298) となっていることを知り、許しがたいほどの失望を感じる。それは、開拓地の人々から悪く言われてきたにもかかわらず、“the leading dressmaker of Lincoln, much respected in Black Hawk” (298) となったリーナやブラック・ホークの若者達の中で“the most solid worldly success” (299) をおさめたタイニィ達との対比の中で浮き彫りにされ、強められている。

しかし、ジムの気持ちも母としてのアントニーアの姿に触れてゆく中で徐々にやわらいでいく。町の写真屋で銀縁の額に入れられたアントニーアの子供の写真を目にした時、ジムは、たとえ私生児であろうと、自分の子供に対するアントニーアの無条件な肯定と誇りに打たれて思わず“How like her! I could forgive her” (304) と叫んで、彼女に会わねばならないという気になるのである。そうしたアントニーアの姿は、ジムが訪ねたスチーヴンズ未亡人の話によって更に確かなものとされる。彼女は現在ジムの祖父の開拓地農場の管理をしていて、アントニーアを一番よく知る女性であるが、彼女については次のように述べている。

She loved it [her baby] from the first as dearly as if she'd had a ring on her finger, and was never ashamed of it. It's a year and eight months old now, and no baby was ever better cared-for. Antonia is a natural-born mother. (318)

アントニーアに対するジムの気持ちは、失望から許しへと変わったのである。だから、ジムは自分の目でアントニーアを見ようと、彼女に会いに出かけるのだ。人々の「哀れみの対象」となって一時は“‘Sometimes I feel like I'm not going to live very long’” (316) と弱音を見せたアントニーアではあったが、しかし開拓地に住み子供を持つ母となって初めて、大地と共に生きる人生に意義を見出し、子供の幸福のために今を努力して生きなければならないという使命を抱いたのである。結婚の失敗という不幸な体験も娘から母となり、未来に向かって生きるアントニーアであればこそ、大地の開拓と家族の創建を成し遂げるためのターニング・ポイント、大きなバネへと変えられたのだ。そうしたアントニーアを現実に目の前にした時、ロマンチストであるジムは彼

女に次のような賛辞を述べるのである。

“Do you know, Antonia, since I've been away, I think of you more often than of anyone else in this part of the world. I'd have liked to have you for a sweetheart, or a wife, or my mother or my sister—anything that a woman can be to a man. The idea of you is a part of my mind, you influence my likes and dislikes, all my tastes, hundreds of times when I don't realize it. You really are a part of me.” (321)

アントニーアがジムにとって、性的な対象とはどうしてもなりえぬことは、すでに見た通りである。加えて、アントニーアの顔は、“the closest, realest face, under all the shadows of women's faces, at the very bottom of my memory” (322) と述べられている。通常、「記憶のままに底にある……一番身近で、一番現実的な女の顔」とは、母親の顔であろう。幼くして母を亡くしたジムにとって、意識の上ではともかく深層意識に於いては、アントニーアは母とも言うべき女性だったのである。だとすると、“Antonía was a big sister, or a kind of great earth mother, a symbol so central to Jim's heart that he cherished her within himself, and surrounded her figure with a gentle clarity like the early morning or sunset light on prairie and cornfields.”⁽⁴¹⁾というサージェントの解釈は、一つのポイントを突いているのは間違いはない。しかし、それと同時に、「今だって結婚することができないはずはないのに、何を世迷い言をいつているのだと、はぐらかされたような腹立たしさを覚えたものだ」⁽⁴²⁾という批評もあるとすれば、もう少し現実的に考えてみる必要もあろう。

大都市のボストンに住み、これからハーバード大学の法学部に進学しようとするロマンチックなジムと、男に捨てられ私生児をかかえ、“I'd always be miserable in a city. I'd die of lonesomeness. I like to be where I know every stack and tree, and where all the ground is friendly. I want to live and die here.” (320) という移民娘のアントニーアとでは、現実には結ばれる可能性が果たしてあると言えるだろうか。知的なジムは、アントニーアが自分にとってどんな大きな意味を持とうと、男と女としてはいかなる形に於いても結ばれぬ仲であることを知っているからこそ、過去完了の願望形で彼女に対する賛辞を述べたのである。であれば、ジムがアントニーアを評価すればするほど、彼は彼女と同じ時間を共有することの出来た子供時代へと帰りがたがるのも理解出来ることである。“I wished I could be a little boy again, and that my way could end there.” (322) というジムの願望は、失われたエデンへの郷愁とともに尽きることのないアントニーアへの評価を内に秘めている。と同時に、ジムの願望が満たされる世界は、空想の中でしかないのも自明である。そこにジムの「静かで哀しい人生の楽の音」⁽⁴³⁾を聞くことが出来よう。

As I went back alone over that familiar road, I could almost believe that a boy and girl ran along beside me, as our shadows used to do, laughing and whispering to each other in the grass. (323)

これに対し、アントニーアはジムと同様二人が共に過ごした子供時代を評価しながらも、彼女の視線は彼とは全く対照的に未来をみつめている。人の子の母となり、自分の使命を自覚して生きる彼女は、美しい過去を未来へ伝えようとしているのである。

“I'm so glad we had each other when we were little. I can't wait till my little girl's old enough to tell her about all the things we used to do.” (321)

ここには人生の意義や使命、過去の再生はあるとしても、“I wished I could be a little boy again, and that my way could end there.” (322) というジムの言葉からは感傷と哀しみの外、再生も希望も感じられはしない。さて、別々の道を歩む二人の人生は二十年後はどうなっているのだろうか。二十年後の二人を見てみよう。

(VI)

二十年後、ジムはクーザック農場にアントニーアとその家族を訪ねる。この章では、大地の開拓と家族の創建を成し遂げたアントニーアの人生の意義を現在のジムの不毛な家庭生活と対比する中で考え、更に彼の子供時代の持つ意味について考えてみたい。

現在のジムの状況から考えてみよう。彼は今はニューヨークに住み、ある大きな西部鉄道会社の顧問弁護士となっている。すなわち、外面的には成功をおさめたエリートではあるが、しかし内面的には恵まれてはいない。それと言うのも、その合わない妻との子供も居ない不幸な家庭生活の故である。作者は、ジムの妻について次のように述べている。

Another [reason why we seldom meet] is that I do not like his wife. She is handsome, energetic, executive, but to me she seems unimpressionable and temperamentally incapable of enthusiasm. Her husband's quiet tastes irritate her, I think, and she finds it worth while to play the patroness to a group of young poets and painters of advanced ideas and mediocre ability. She has her own fortune and lives her own life. For some reason, she wishes to remain Mrs. James Burden. (Introduction 2)

ここに、ジムの現在の不毛性とそれに対する彼の失望を読みとることは容易である。ジムが開拓地のディヴァイドからレッド・クラウドへ、レッド・クラウドからリンカーンへ、リンカーンからポストンへと、アントニーアと共に子供時代を過ごした場所から遠ざかるにつれて、益々彼の目も評価も過去へ、開拓地へ、それらの象徴であるアントニーアへと向けられていったことは、すでに見た。これは、裏を返せば、現在や都市生活への失望、否定以外の何ものでもなからう。

しかし、その機会があったにもかかわらず、ジムがアントニーアを訪ねるのを伸ばしてきたのは、彼女の“aged and broken” (328) な姿を見たくはなかったからである。“In the course of twenty crowded years one parts with many illusions. I did not wish to lose the early ones. Some memories are realities, and are better than anything that can ever happen to one again.” (328) という言葉に見られるように、ジムは自己の体験から時間の持つ重みを知っていたのである。しかし、彼がとうとうアントニーアを訪ねる気持ちになったのは、今はサンフランシスコでドレス・メーカーをしているリーナと出会ってからである。彼女がジムに“a cheerful account of Antonia” (328) を語り、彼女に会いに行くように強く勧めたのだ。

ここ迄きたところで、作品の手法について一言述べておきたい。“Willa Cather's books are studded with classical references and allusions”⁽⁴⁴⁾、あるいは“one has to recognize that in many qualities of style and mind Willa Cather may quite well be 'steeped in the Classics' and as Virgilian, specifically, as she has been said to be.”⁽⁴⁵⁾という指摘にもあるように、一般にキャザーの作品は古典文学の影響を度外視しては考えられないのであるが、とりわけ、この『私のアントニーア』ではヴァージルの『農耕詩』と共にホメー

ロス『オデュッセイア』の影響が色濃いと言える。“the grass was the country, as the water is the sea” (15) という新大陸の「草」の色を形容するのに、ホメーロスが『オデュッセイア』の中で用いた「海」の色と同じ“wine-coloured”あるいは“of wine stains”が用いられていた⁽⁴⁶⁾のは、二章で見た通りであるが、また第三巻の「リーナ・リングード」の構成は『オデュッセイア』の第五巻のそれによく似ていることもすでに指摘した。『オデュッセイア』との関連については、マックファーランドも“Jim's journey is a kind of odyssey; the novel describes his adventure in his journey 'home to [him]self' (371), just as Homer sings of Odysseus's journey home to Penelope.”⁽⁴⁷⁾と指摘している。と見てくれば、二十年ぶりにアントニアを訪ねて古里のディヴァイドへ帰るジムの姿は、同じく二十年ぶりに古里イタケのペネロペのもとに帰りつくオデュッセウスの姿と重なっているのも単なる偶然ではありえない。“having a person return home and find things changed”⁽⁴⁸⁾という手法はキャザーの作品ではよく用いられるが、多分彼女はこれを『オデュッセイア』から学んだのであろう。

さて、二十年という時の流れは必然的に変化と意義を伴うものだとすれば、⁽⁴⁹⁾アントニアはいかなる姿となってジムの前に現われるのであろうか。次の文を見てみよう。

We stood looking at each other. The eyes that peered anxiously at me were— simply Antonia's eyes. I had seen no others like them since I looked into them last, though I had looked at so many thousands of human faces. As I confronted her, the changes grew less apparent to me, her identity stronger. She was there, in the full vigour of her personality, battered but not diminished, looking at me . . . (331—332)

たとえアントニアの外面は“battered”されてはいいても、彼女の“inner glow” (336) は決して色あせもせず、また“the fire of life” (336) も失われてはいない。すでに見たように、大地と共に生きる生活に意義を見出し、子供のよりよい未来のために今を努力して生きるという使命を抱いたアントニアであったが、この意義と使命は二十年という歳月の後に人間と大地の豊饒なる姿となって結実するのである。

最初に、アントニアの創建した家族から見てみよう。彼女は今、同国人のアントン・クーザックと再婚し、十一名もの素晴らしい子供を持つ母となっている。母をとり囲む子供達の姿には“a kind of physical harmony” (349) があり、彼等は兄弟の多いことを自慢に思うと同時に、互いに誇りを持ちあっているのをジムは感じたが、彼が子供達から一番衝撃を与えられたのは、彼等が地下の貯蔵室の入口から陽の光の中に出て来た時であった。

We were standing outside talking, when they all came running up the steps together, big and little, tow heads and gold heads and brown, and flashing little naked legs; a veritable explosion of life out of the dark cave into the sunlight. It made me dizzy for a moment. (338—339)

これはジムの不毛性とくらべて、何という豊饒さであろうか。彼がアントニアを、“She was a rich mine of life, like the founders of early races.” (353) と思ったのも当然であろう。

アントニアの子供達には、過去が現在の中に美しく再生している。まず子供達の名前であるが、彼等の幾人かは過去のなつかしい人々にちなんだ名付けられている。例を挙げれば、アンブローシュやユルカはアントニアの兄妹から、チャーリィとニィナはハーリング家の子供達からという風

に！

次に、アントニーアが当然田舎を評価しながらも、町から学んだ美点もまた子供達の人となりの中に再生されている。それは、次の文を見れば明らかである。

“Oh, I'm glad I went! I'd never have known anything about cooking or housekeeping if I hadn't. I learned nice ways at the Harlings', and I've been able to bring my children up so much better. Don't you think they are pretty well-behaved for country children? If it hadn't been for what Mrs. Harling taught me, I expect I'd have brought them up like wild rabbits. No, I'm glad I had a chance to learn; but I'm thankful none of my daughters will ever have to work out.” (343—344)

第三に、アントニーアがシメルダ氏から受け継いだヨーロッパ文化の精神も彼女の子供達に引き継がれ、再生している。子供の一人レオが、ジムのために祖父シメルダ氏のヴァイオリンを独習ながら大変上手に引きこなす場面があるが、これはその象徴と解釈することが出来る。⁽⁵⁰⁾“I loved my children and always believed they would turn out well” (343) という言葉から窺えるように、アントニーアの使命に生きた人生は報われようとしている。ただ、これほどの豊饒と肯定に満ちたアントニーアの家庭ではあるが、キャザーの描く家庭について考える時に、どうしても見落としてはならないことがある。それは、夫婦という人間関係に対する彼女の否定的な見方である。ジムはアントニーアの夫アントン・クーザックについて次のように述べている。

It did rather seem to me that Cuzak had been made the instrument of Antonia's special mission. This was a fine life, certainly, but it wasn't the kind of life he had wanted to live. I wondered whether the life that was right for one was ever right for two! (367)

この作品でもジム夫婦、シメルダ夫婦、カッター夫婦、ベンソン夫婦等が極めて否定的かつ pessimistic に描かれているが、これが夫婦という人間関係に対するキャザーの基本的な見方であることは、よく知られている。“I belong on a farm. I'm never lonesome here like I used to be in town.” (343) というアントニーアと、“one of the loneliest countries in the world” (366) という開拓地で “At first I near go crazy with lonesomeness” (367) という “a city man” (366) のアントンとでは、結婚生活は大変であり、ジムが “I wondered whether the life that was right for one was ever right for two!” という気持ちを抱いたのも無理はない。しかし、アントンが第二のシメルダ氏とはならず、ここ迄やってこれたのは、ひとえに妻アントニーアのおかげであることは、彼の次の言葉から明らかである。

- 1) “We always get along fine, her and me, like at first. The children don't make trouble between us, like sometimes happens.” (366)
- 2) “At first I near go crazy with lonesomeness,” he said frankly, “but my woman is got such a warm heart. She always make it as good for me as she could. Now it ain't so bad; I can begin to have some fun with my boys, already!” (367)

アントンにはジムのような現在への失望と否定はないことは確かである。過去に “I near go crazy with lonesomeness” であったアントンをして今は “Now it ain't so bad”

と言わしめたのは妻のアントニーアと素晴らしい子供達、特に前者の暖かい心と忍耐強い努力であったとするなら、彼等の結婚生活の中にキャザーの否定的でベスマスチックな結婚観だけを読み取ることは片手落ちではなからうか。なぜなら、なによりも、アントンの言葉は妻であり母であるアントニーアへの肯定と賛美を示しているからである（そしてアントニーア自身も “I never got down-hearted. Anton's a good man” [343] と言っている）。

次に、大地の豊饒について見てみよう。開拓者に必要なのは “imagination and strength”⁽⁵¹⁾ であるが、「想像力」とは面前の「物そのもの」の中に「物についての観念」を享受することであり、「強さ」とは、その享受した「観念」を現実のものにする力のことである。開拓者として成功したアントニーアはこの二つのものを兼ね備えていたのは当然であるが、具体的には夫のアントンが彼女について次のように言っている。

“It was a pretty hard job, breaking up this place and making the first crops grow,” he [Cuzak] said, pushing back his hat and scratching his grizzled hair. “Sometimes I git awful sore on this place and want to quit, but my wife she always say we better stick it out. The babies come along pretty fast, so it look like it be hard to move, anyhow. I guess she was right, all right. We got this place clear now.” (365)

さて、大地の豊饒については、農場の中央にある果樹園に焦点を当てながら考えてみたい。“I love them [apple trees] as if they were people” (340) という言葉に明らかなように、アントニーアは自然を子供と同じように愛している。彼女は終日農場で働いた後に、一本の木もない土地に木を植え、水運び、たわわに実る果樹園を作りあげたのである。彼女の自慢の種である素晴らしい果樹園については、次のように述べられている。

There was the deepest peace in that orchard. It was surrounded by a triple enclosure; the wire fence, then the hedge of thorny locusts, then the mulberry hedge which kept out the hot winds of summer and held fast to the protecting snows of winter. The hedges were so tall that we could see nothing but the blue sky above them, neither the barn roof nor the windmill. The afternoon sun poured down on us through the drying grape leaves. The orchard seemed full of sun, like a cup, and we could smell the ripe apples on the trees. The crabs hung on the branches as thick as beads on a string, purple-red, with a thin silvery glaze over them. (341)

ここに明らかなように、果樹園は三重の囲いによって暑さ、寒さは言うに及ばず、外側のあらゆるものからも守られている。それ故、そこからは “the symbols of the way in which they earn their living”⁽⁵²⁾ である納屋も風車も目に入ることはない。熟れたりんごが枝にたわわに実り、労働の必要を感じさせないこの果樹園は、文字通り “earthly paradise”⁽⁵³⁾ を連想させる。

更に、果樹園の中央にはジムを感動させた “a grape arbour, with seats built along the sides and a warped plank table” (340) があるが、これがかつてアントニーアがジムに語ったボヘミアの彼女の家の後ろにあった庭とくらべてみよう。

“It makes me homesick, Jimmy, this flower, this smell,” she said softly. “We have this flower very much at home, in the old country. It always grew in our yard and my papa had a green bench and a table under the bushes.

In summer, when they were in bloom, he used to sit there with his friend that played the trombone. When I was little I used to go down there to hear them talk—beautiful talk, like what I never hear in this country.”

“What did they talk about? I asked her.

She sighed and shook her head. “Oh, I don’t know! About music, and the woods, and about God, and when they were young.” (235—236)

両者の対照から明らかなように、果樹園はアメリカに於けるボヘミアの庭の再生である。アントニーアは自らが開拓した豊饒なる農場の中央に、“her own idea of the civilized garden”⁽⁵⁴⁾を再現させたのである。ヨーロッパ文化の精神は、彼女の家庭と同様、大地の上にも引き継がれていると言ってよからう。国を造る素材であった大地は、開拓者アントニーアの愛と努力を通して、ヨーロッパ文化の精神を伝える “‘There ain’t one of our neighbours has an orchard that bears like ours.’” (340) という見事な果樹園を中心に持つ豊かな農場へと変えられたのである。彼女が地表の豊饒の女神デメテルにたとえられるのも無理はなからう。⁽⁵⁵⁾だからこそ、ジムはデメテルたる彼女を次のように高く評価しているのである。

She had only to stand in the orchard, to put her hand on a little crab tree and look up at the apples, to make you feel the goodness of planting and tending and harvesting at last. (353)

家族であろうと大地であろうと、常に自らの愛の対象に豊かな生命を与えるアントニーアこそ、まさに “a rich mine of life” (353) であったのだ。地平線の赤くて丸い太陽の中に大きく黒々と浮かびあがる鋤を通して象徴され、賛歌されたアントニーアによる定住農耕生活は、“the vitality of nature”⁽⁵⁶⁾と “the order of civilization”⁽⁵⁷⁾の融合する中で新大陸の大地に深く、しっかりと根を降ろしたのである。やがて彼女の農場は、“their yield would be one of the great economic facts, like the wheat crop of Russia, which underlie all the activities of men, in peace or war” (137) という “the world cornfields” (137) の一画へと拡大、増大してゆくのである。二十年前、大地と共に生きる生活に意義を見出したアントニーアであったが、それはまた彼女の使命と同様みごとに報われたのだ。時間の経過がアントニーアをして人間と大地の豊饒を、過去の現在への再生と未来への期待を可能ならしめたとするなら、それはアントニーアにとって価値あるものであり、肯定されるべきものであったと言える。では次に、ジムにとって時間とは何であったか、またそれが彼にどういう意味を持つのかということについて、改めて彼の人生を振り返る中で、考えてみたい。

ジムが子供時代を過ごした開拓地のディヴァイドとは、エデンの園であった。そこで恵まれたバーデン家の一員であるジムは、労働に参加する必要もなく、また子供なるが故に時間の持つ重みも知らず、日々アントニーアを冒険と遊びの友として、驚きと喜びに満ちた自然の中で “entirely happy” (18) な時間を過ごしたのである。しかし、三年後十三歳となった彼は、この園を出て町へと移転する。性に目覚め異性に関心を抱き始めたジムは、開拓地の娘達と町の娘達の肉体と生き方の違いに目を向け、やがてそれは前者の賛美と後者の痛烈な批判という評価へと繋がってゆく。この評価は、歴史も新しく使命に燃える州立大学に入学した後、“for I shall be the first, if I live, to bring the Muse into my country.” (264) というヴァージルの姿勢と生き方への感動と賛美へと発展し、未開のディヴァイドはふくらみを持った時・空の中でヨーロッパ文化を連れてくる場として位置づけられ、またそのために生きる人生は価値あるものとして捉えられる。

しかし、皮肉にも、最終的にディヴァイドの人間と自然を豊饒なる姿に変えて、そこにヨーロッパ文化を再生させたのは、“I was the first to bring the Muse into my country.” (264) というヴァージルに感動していたジムではなくして開拓者として大地と共に生きたアントニーアであった。

と見てくれば、まず第一に、ジムがアントニーアとその人生をどんなに高く評価することはあっても、不毛に終わった彼自らの時間を、人生の経験を無意味で小さなものとしてしか評価しないのも当然であろう。それは、彼自身の言葉から明らかである。クーザック農場を訪ねた後、町から開拓地へとかすかに残る三十一年前の思い出の轍の跡をみつめながら、ジムは

“I had the sense of coming home to myself, and of having found out what a little circle man's experience is.” (371-372)

という思いを抱くのである。

さて次に、時間の経過の中でディヴァイドの人間と大地に豊かな実りを与え、過去を現在に再生させることが出来たのは、アントニーアが開拓者としてディヴァイドの大地と共に生きることによってであったとするなら、それは太陽の中に浮かびあがる鋤を通して象徴されていたアントニーアによる定住農耕生活への賛歌を結果的に示し、確認するものに他ならない。過去が現在の中に意義ある形で再生しているクーザック農場であるからこそ、ジムは “my mind was full of pleasant things” (370) と言うことが出来たのであるが、一方時間が空しく過ぎたことを感じさせる町であるからこそ、彼はブラック・ホークで “the curious depression that hangs over little towns” (370) を感じたのである。これは町を批判しながらも、町から町へと移り住んで不毛に終わったジムの人生によっても象徴されているが、具体的には次のように述べられている。

My day in Black Hawk was disappointing. Most of my old friends were dead or had moved away. Strange children, who meant nothing to me, were playing in the Harlings' big yard when I passed; the mountain ash had been cut down, and only a sprouting stump was left of the tall Lombardy poplar that used to guard the gate. I hurried on. (369)

アントニーアによる定住農耕生活の時間とは、生と死と再生とが意義ある形で循環する円環のイメージであるが、一方町の時間とは過去と現在とが不毛につながる直線のイメージであると言うことが出来る。⁵⁸⁾これが、アントニーアとジムの人生の時間イメージなのだ。家庭生活のみに焦点を合わせてみても、アントニーアの場合はカオスにたとえられる子供時代の不幸な家庭、父親の自殺、結婚の失敗というマイナスの体験さえもプラスとなる形で現在の家庭生活の中に再生させているが、一方ジムの場合はバーデン家という秩序と平和のある家庭で育ち、ヨーロッパ文化を指標として生きたにもかかわらず、現在の彼の家庭生活は不幸と不毛そのものである。

共にエデンの園にたとえられるディヴァイドを出て以来、時間の経過は再びそこに帰ってきたアントニーアを<生>そのもののイメージへと変え、彼女の人生を意義あるものとしたのに対し、同じ時間の流れは町から町へと移り住んだジムを<不毛>と<死>のイメージへと変え、彼の人生を実りのうすい失望に満ちたものとしたのである。草原の国に対する彼の信頼と知識が、西部への鉄道の敷設に大きな役割を果たしたこと、アントニーアの価値と意義を評価出来る客観的能力を身につけたこと以外は: (“One must know the world so well before one can know the parish”⁵⁹⁾)

ジムにとって時間とは、ギリシア神話のクロノスの鎌によって象徴されるもの以外のなにものでもなかったのである。その経過は、彼を一步一步<死>へと導くものであった。とすれば、ジムが

なぜ過去を評価するのか問うまでもなからう。彼の人生に於いて “entirely happy” (18) であった時間とは、ディヴァイドの自然と一つとなった “timeless” でオプチミスティックな子供時代だけであったのだ。そしてアントニーアとは、その過去の象徴、すなわち “the country, the conditions, the whole adventure of our childhood” (Introduction 2) を意味するものであると同時に、現在の姿は賛美されるべき “a rich mine of life” であるとするなら、ジムが過去を評価すると共に、否もはや帰れぬ過去であるだけに、より一層アントニーアを評価するのは当然である。小説の最後は “Whatever we had missed, we possessed together the precious, the incommunicable past.” (372) という言葉で終わっている。(60)

小説全体は、時間の経過と共に様々な苦しい体験を積み重ねながらも、生まれながらの母なる女性として、人間と大地に生命を与え、それらを実りの豊かなものとしてゆくアントニーアの意義ある人生と価値を高く評価し、賛美しながらも、物語の背景には「いと楽しき日はいち早く過ぎゆく」というヴァーヅルの思いが色濃く漂う回想形式で書かれ、最後は語り手がヒロインと共有した過去を賛美する形で終わっている。

キャザーの文学とは思いつから始まるのが特色とすれば、彼女は時間の持つ意義と同時に、はかなさ、空しさをもよく知っていたはずである。辺境もそこで生きる開拓者の人生も、やがては消えゆく運命にあることを考えれば、それらを素材とする彼女の作品が段々と時間の重みにその力点を移してゆくのは自明であるが、その中で『私のアントニーア』は時間の重みを知りながらも、それ以上に時間の持つ意義を賛美出来た作品なのである。(61)

この作品が与える感動は主にそこからくるものである。が同時にネブラスカの辺境とそこで生きた開拓者という一地域的、一時代的なもの(美や価値や人間の尊厳など)が、“a parish”のみならず “the world” を、更に時間の持つ重みと同時にその意義をも深く知る語り手によって、聖書やギリシア・ローマ古典の世界、時・空を越えて人間に普遍的なもの、としっかりと連関して捉えられているという確かさの中にあることも忘れてはなるまい。ここに揺るぎない作品評価があると云ってよからう。

ともあれ、『お開拓者達よ』にせよ『私のアントニーア』にせよ、時間のプラス評価、すなわち意義を賛美するキャザーの初期の作品が、最後には開拓者と大地とのなんらかの価値ある<再生>を称えて終わっていることは、キャザー文学を考える上で意味深いものであろう。

NOTES

- (1) John H. Randall III, *The Landscape and the Looking Glass: Willa Cather's Search for Value* (Westport: Greenwood Press, 1973), p. 105.
- (2) 拙稿「Willa Cather と *O Pioneers!* について: (1) キャザーの素材とその展開 (2) 作品の構成と内容—ギリシア神話との比較の中で」高知大学学術研究報告 第31巻人文科学第4号(1982)参照。
- (3) Willa Cather, *My Antonia* (Boston: Houghton Mifflin, 1946), p. 271.
- (4) ストークは *The Professor's House* 迄のキャザーの作品を “epic” から “pastoral” を経て “satire” へと展開してゆくことと捉え、*My Antonia* を “pastoral of innocence” に属するものとして論じている。
- Cf. David Stouk, *Willa Cather's Imagination* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1975), pp. 46-58.
- (5) ジムという語り手の設定については次の言葉が参考になる。

1) “A comment on *My Antonia* that Willa Cather made in an interview she gave in Lincoln a few years after the book came out shows that in her use of Jim as narrator she had been trying to achieve two effects that were not really compatible: Jim was to be fascinated by Antonia as only a man could be, and yet he was to remain a detached observer, appreciative but inactive, rather than take a part in her life” from E. K. Brown, *Willa Cather: A Critical Biography* (New York: Alfred A. Knopf, 1970), p. 202.

2) “she explained that most of what she knew about Annie had come from talks with

young men. 'She had a fascination for them, and they used to be with her whenever they could. They had to manage it on the sly because she was only a hired girl.' Thus Willa Cather created as her narrator Jim Burden, whose age, experience, and personal history closely paralleled her own. Sarah Orne Jewett perhaps would have faulted her for this, as she had for using a male viewpoint in 'On the Gulls' Road.' But Willa Cather's preference for male narrators in her fiction was inveterate and no doubt sprang from the strong masculine element rooted deep in her personality" from James Woodress, *Willa Cather: Her Life and Art* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1970), p. 176.

3) "Miss Cather said in 1921: One of the people who interested me most as a child was the Bohemian hired girl of one of our neighbors, who was so good to me. She was one of the truest artists I ever knew in the keenness and sensitiveness of her enjoyment, in her love of people and in her willingness to take pains. I did not realize all this as a child, but Annie fascinated me and I always had it in mind to write a story about her.

But from what point of view should I write it up? I might give her a lover and write from his standpoint. However, I thought my Antonia deserved something better than the Saturday Evening Post sort of stuff in her book. Finally, I concluded that I would write from the point of a detached observer, because that was what I had always been.

Then I noticed that much of what I knew about Annie came from the talks I had with young men. She had a fascination for them, and they used to be with her whenever they could. They had to manage it on the sly, because she was only a hired girl. But they respected and admired her, and she meant a good deal to some of them. So I decided to make my observer a young man.

There was the material in that book for lurid melodrama. But I decided that in writing it I would dwell very lightly on those things that a novelist would ordinarily emphasize, and make up my story of the little, every-day happenings and occurrences that form the greatest part of everyone's life and happiness" from Mildred R. Bennett, *The World of Willa Cather* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1961), pp. 46-47

(6) James Woodress, *op. cit.*, p. 181.

(7) Cf. 1) "Willa had forecast her to me; as a beautiful object in the middle of a table, which could be viewed from all sides and in varying lights" from Elizabeth Shepley Sergeant, *Willa Cather a Memoir* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1967), p. 150.

2) "She (Cather) herself felt that it was the best thing she had done—that she had succeeded, more nearly than ever before, in writing the way she wanted to write" from Edith Lewis, *Willa Cather Living* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1976), p. 107.

(8) David Stouk, *op. cit.*, p. 34.

(9) James Woodress, *op. cit.*, p. 43.

(10) John H. Randall III, *op. cit.*, p. 112.

(11) "a land flowing with milk and honey" (Exodus 3: 8) in *The Holy Bible: Authorized King James Version* (Charlotte, North Carolina: Bible House, 1976). 以下聖書からの引用はすべてこの版による。

(12) Cf. "And Joshua the son of Nun was full of the spirit of the wisdom; for Moses had laid his hands upon him: and the children of Israel hearkened unto him, and did as the LORD commanded Moses" (Deuteronomy 34: 9).

(13) John H. Randall III, *op. cit.*, p. 117.

(14) *Loc. cit.*

(15) *Loc. cit.*

(16) Cf. "the place of parents is at least partly filled by other adults of his parents' generation who live with the family. In particular their place is taken by the cowboy Otto Fuchs and the hired hand Jake Marpole, who has come to Nebraska with Jim all the way from Virginia. So, even in the Burden family, Willa Cather's three-generation pattern is maintained" from John H. Randall III, *op. cit.*, p. 112.

(17) Cf. "The Shimerda family is not a unit. It breaks down into little groups which work at cross-purposes to one another. The grasping Mrs. Shimerda and her surly and arrogant son Ambrosch form one of these groups; Antonia and her father form another" from John H. Randall III, *op. cit.*, p. 117.

- (18) *Loc. cit.*
- (19) David Stouk, *op. cit.*, p. 7.
- (20) Cf. "the wine-dark sea" from Homer, *The Odyssey*, trans. E. V. Rieu (Penguin Books, 1976), p. 30.
- (21) Cf. "The novel spans thirty-one years" from Richard Giannone, *Music in Willa Cather's Fiction* (Lincoln: University Press, 1968), p. 108.
- (22) David Stouk, *op. cit.*, p. 47.
- (23) 「農耕において土壌や季節とこのように長期にわたって交渉をもつ結果、存在についてある種の楽観主義的概念が姿をあらわしてくる。すなわち、死は存在様態の一時的変化にすぎず、冬は、けっして決定的ではない。なぜなら冬のあとには、「大自然」の全面的な再生、新しく無限な生命形態の出現が到来するからである。何ものも、ほんとうには死なず、すべては原初の物質に再合一し、新しい春の到来を待ちつつ休息しているのである」、堀一郎監修、久米博訳、『エリアーデ著作集第三巻、聖なる空間と時間』（せりか書房、1981）、p. 8.
- (24) David Stouk, *op. cit.*, p. 47.
- (25) Cf. "The fact that Book I takes the narrator through one complete cycle of the seasons (Jim arrives in Nebraska in early fall and the section ends the following summer) places his experiences in the context of a cyclical rhythm that is ever-recurring, hence outside of chronological time" from David Stouk, *op. cit.*, p. 48.
- (26) Cf. "And the angel of the LORD appeared unto him in a flame of fire out of the midst of a bush: and he looked, and, behold, the bush burned with fire, and the bush was not consumed. And Moses said, I will now turn aside, and see this great sight, why the bush is not burnt. And when the LORD saw that he turned aside to see, God called unto him out of the midst of the bush, and said, Moses, Moses. And he said, Here am I. And he said, Draw not nigh hither: put off thy shoes whereon thou standest is holy ground" (Exodus 3: 2-5).
- (27) David Stouk, *op. cit.*, p. 47.
- (28) Exodus 3: 5. Cf. "This image suggests that the prairie is transparent to the sacred, infused with a tremendous and awe-inspiring power which cannot be adequately described but which is testified to in religion and myth" from Dorothy Tuck McFarland, *Willa Cather* (New York: Frederick Ungar Publishing Company, 1972), p. 41.
- (29) 風間喜代三訳、「トラキスの女たち」呉茂一、高津春繁、田中美知太郎、松平千秋編『ギリシア悲劇全集 巻Ⅱ』（人文書院、1976）、p. 87.
- (30) 高津春繁訳、「オイディプス王」前掲書、p. 269.
- (31) 松平千秋訳、「トロイアの女」『ギリシア悲劇全集 巻Ⅲ』p. 344.
- (32) 松本克巳訳、「アンドロマケ」前掲書、p. 156.
- (33) ジムがイノセントなエデンの楽園を出たということはこの巻から始まる性の芽生えによっても明らかである ("Sexual awakening marks the end of childhood" from David Stouk, *op. cit.*, p. 36) Cf. "And the eye of them both were opened, and they knew that they were naked; and they sewed fig leaves together, and made themselves aprons" (Genesis 3: 7) and "And Adam knew Eve his wife; and she conceived" (Genesis 4: 1).
- (34) John H. Randall III, *op. cit.*, p. 127.
- (35) Cf. 「女性と耕された畝との、生殖行為と農耕作業との同一視は、古代からの、しかも広く流布している直観なのである。この神話的儀礼的な総合の中に、いくつかの要素を区別する必要がある。すなわち、女性と耕地との同一視、男根と鋤との同一視、農耕作業と生殖行為との同一視である」前掲『エリアーデ著作集第二巻 豊饒と再生』、p. 160.
- (36) Cf. 1) "In this manner a perfectly ordinary, homely farming tool is made the symbol of a settled agricultural civilization, which is thereby given a kind of cosmic approval" from John H. Randall III, *op. cit.*, p. 305.
2) "The plow is the symbol of the pioneer on the plains" from Dorothy Tuck McFarland, *op. cit.*, p. 45.
- (37) Richard Giannone, *op. cit.*, p. 107.
- (38) John H. Randall III, *op. cit.*, p. 137.
- (39) Donald Sutherland, "Willa Cather: The Classic Voice" in *The Art of Willa Cather* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1973), p. 162.
- (40) Cf. "In pastoral the imagination attempts to exclude sexuality because it is both individual and temporal and leads away from the innocent unified vision of childhood" from David Stouk, *op. cit.*, p. 51.
- (41) Elizabeth Shepley Sergeant, *op. cit.*, p. 151.
- (42) 浜田政二郎『キャザー研究』（南雲堂、1960）、p. 109.
- (43) "Composed A Few Miles above Tintern Abbey, on Revisiting the Banks of the

Wyę during a Tour. July 13, 1978" (1. 91) in E. DE Selincourt, ed., *The Poetical Works of William Wordsworth*, II (Oxford: Oxford University Press, 1969), p. 261.

(44) James Woodress, *op. cit.*, p. 43.

(45) Donald Sutherland, *op. cit.*, p. 159.

(46) 「ぶどうは不死の植物的表現であった」(前掲『エリアーデ著作集第二巻 豊饒と再生』p. 204)とすれば、ジムの子供時代の空間のみがぶどうと関連づけて形容されているのも、意味のあることと言えよう。なぜなら子供時代の世界とは、すでに見たように、“timeless world”であるからである。

(47) Dorothy Tuck McFarland, *op. cit.*, p. 371.

(48) Donald Sutherland, *op. cit.*, p. 170.

(49) Cf. 1) 「時間には人間にとっての「意義」が託されている。なぜなら人間の生は時間の下で営まれるからであり、また自分が何者であるかという問題も、自分が何に変わったかによって、つまり客観的な歴史的事実と、自己の歴史をつくりあげ自我の同一性を構成するような意義深い連想のパターンとを合体させることによってはじめて問題となり得るからである」H. マイヤー・ホフ『現代文学と時間』志賀謙、行吉邦輔訳(研究社、1974)、p. 37.

2) 「さまざまな時間イメージを見わたすと、まずそこには時間に対する情緒的な反応(評価)によって、プラス・イメージとマイナス・イメージとが区別される。前者は時間の経過が人間の幸福などというプラス価値と結びついていると判断するものであり、後者は時間の流れが不幸とか苦悩などのようなマイナス価値と結びついていると見なすものである」中埜肇『時間と人間』(講談社、1976)、p. 177.

(50) Cf. “Old Mr. Shimerda’s instrument, as Jim Burden notes, is too big for Leo, but he played very well for a self-taught boy” (347). What was literally dead, what Mr. Shimerda had cultivated and loved in Prague, has been reborn—and it is the violin, first put aside and then taken up again, which represents the process of transformation and regeneration in *My Antonia*” from Richard Giannoe, *op. cit.*, pp. 115–116

(51) John H. Randall III, *op. cit.*, p. 70.

(52) *Ibid.*, p. 142.

(53) *Loc. cit.*

(54) *Ibid.*, p. 141.

(55) Cf. *Loc. cit.*

(56) *Ibid.*, p. 145.

(57) *Loc. cit.*

(58) Cf. 「農耕や牧畜の労働内容は、永久に続く自然の循環と反復のリズムに従うことから由来する…このような状況のなかで形成される時間イメージが、円環であることは明らかであろう。

つねに新しい可能性を探究し、新機軸を開発することによって、たえず過去を止揚して未来を開拓することを目指す都市の時間イメージが直線であることは明らかであり、しかも都市の志向する発展に終極はないから、それは無限直線イメージである」中埜肇 前掲書、pp. 187-191.

(59) John H. Randall III, *op. cit.*, p. 61.

(60) Cf. “pastoral art turns on the paradox that what is being celebrated can never be experienced again, that its reality is only a memory. Implicit in pastoral is an undying tension between the desire to return to the past and the sober recognition that such a desire can never be fulfilled. Nostalgia is the emotion evinced by pastoral art, and it fuses together the pleasure of remembrance with the painful awareness of mutability. The imaginative tension in *My Antonia* is perhaps best described as a creative opposition between the novel’s content and its form” from David Stouk, *op. cit.*, p. 46.

(61) Cf. “*My Antonia* shows fertility of both the soil and human beings. Thus, in a profound sense *My Antonia* is the most affirmative book Willa Cather ever wrote. Perhaps that is why it was her favorite” from John H. Randall III, *op. cit.*, p. 149.

『私のアントニア』について考える時、ジムに力点を置いてしまうと、時間の重みに捉われるあまり、その意義を過小に評価してしまうという誤りをおかしてしまう。この作品の中ではジムは語り手であり、その彼によって徹頭徹尾賛歌されているのはヒロインのアントニアその人であり、彼女の人生が肯定で満ちみちているのは、すでに見た通り、今更述べる必要もない。

またジムにしても、その人生の中で広い世界と時間の持つ意味を深く知ったが故に、アントニア評価を単なる一人よがりのものではなくて普遍的なものにまで高め、『私のアントニア』という確かな作品を、彼女とのかかわりあい故に、書きあげることが出来たとするなら、ジムの時間の中にマイナス評価、時間の重みのみを読みとることは片手落ちであろう。

(昭和58年9月28日受理)

(昭和59年3月6日発行)

